

論 文

“同志社人”稲垣藤兵衛の基督教社会事業をどうとらえるか

—日本統治時期台湾の稲江義塾を中心に—

宮 本 義 信

生活科学部・人間生活学科

Abstract

This study aims to clarify the Christian social work of Tohbei INAGAKI who graduated from Doshisha University in 1914 and founded a child welfare institution named “*Inae Gijyuku*” in Taipei two years later. I was especially struck by the many Taiwanese who said “I really have respect for Inagaki,” and the sense of excitement conveyed in his stories. However, many Japanese don’t fully understand exactly what he did. Why is this? It’s one of the reasons I did research on the social work practice of Inagaki.

Inae Gijyuku was the first settlement house for the children of poor families in Taiwan. That is to say, it was a neighborhood-based facility established in the urban slums to bring people who were poor, deficient in money or means of subsistence together, to share knowledge and skills for their mutual benefit. In addition, his social movement for labor unions, agricultural cooperatives, and women’s liberation is widely recognized as the keyword of INAGAKI’s legacy. While his practice focused on the development of individuals, his ideas or skills continue to influence social, political and economic reform in Taiwan.

He equipped the poor and needy to integrate Christian faith and social work practice. To fulfill its mission, he offered community services and benefits to individuals and groups. But he couldn’t attain his goal and turned back partway in 1947. Although he doesn’t appear on the stage of Doshisha history at all, he is just the right man for a pioneer in the field of Doshisha Social Welfare.

はじめに

筆者は、これまで、“同志社人”稲垣藤兵衛の社会事業思想と実践を主題に研究を継続してきた¹。稲垣は、1892（明治25）年3月10日、京都府に生まれ、1914（大正3）年、同志社大学（専門学校令による）政治経済部経済科を選科生として卒業した²。同年の神学科卒業生に、田崎健作（1885–1975年）³、普通学校卒業生に山本宣治（1889–1926年）⁴、翌1915（大

正4）年の神学科卒業生に、清水安三（1891–1988年）⁵、周再賜（1888–1969年）⁶がいる。そして、卒業と同時に台湾に渡り、1916（大正5）年、台北市大稻埕に細民児童の私塾「稲江義塾」を創設し、数々の先駆的社会事業を展開した。しかし、終戦により、1947（昭和22）年、国民党政府より強制帰還を命ぜられ、最後の引揚船で帰国する。その後、1955（昭和30）年3月20日、病を得て63歳で没す（表1. 稲垣藤兵衛 略年譜 参照）。

筆者と並行する形で台湾においても稲垣の研究が進められ、その過程で、真理大学⁷及び佛教慈濟功德会⁸より文献の提供を受けた。本稿

A Study on Christian Social Work of the Settlement House “*Inae Gijyuku*” in Taiwan: Its History and Doshisha Graduate Tohbei INAGAKI

では、上記の文献及び筆者が渉猟した資料を基に、従来の認識に再検討を加えたい。そこで本課題を達成するため、第一に、稲江義塾の概要を述べ、第二に、それとの関連で稲垣の人間を探る。第三に、稲垣と共に無政府主義団体・孤魂連盟を組織し活動した台湾の代表的社会事業家・施乾との近似性を取り出し、当時の基督教社会事業家の傾向を推論する。そして第四に、以上を踏まえ、稲垣藤兵衛の基督教社会事業に対する台湾の今日的評価について考察する。

表 1. 稲垣藤兵衛 略年譜

1892(明治25)年	3月10日出生(京都府)
1894(明治27)年	日清戦争
1895(明治28)年	下関条約(遼東半島、台湾、澎湖諸島の割譲)台湾、日本統治下
1897(明治30)年	片山潜、東京神田にセツルメント・キングスレー館を設立
1898(明治31)年	児玉源太郎が第4代台湾総督に就任 後藤新平が総督府民政局長に就任 台湾公学校令制定 保甲条例制定
1899(明治32)年	台北仁濟院・台南慈恵院・澎湖晋濟院を設立 <u>施乾、出生(台北縣淡水)</u>
1904(明治37)年	日露戦争 台中慈恵院を設立
1905(明治38)年	ポーツマス条約(旅順・大連の租借権、北緯50度以南の樺太の割譲)
1906(明治39)年	嘉義慈恵院を設立
1910(明治43)年	大逆事件 韓国併合 台湾総督府、先住民政策「五箇年計画理蕃事業」を開始 大嵯嵐の役
1911(明治44)年	辛亥革命
1912(大正1)年	井上伊之助、渡台し山地伝道を開始 中華民国成立 大正デモクラシー(自由主義の風潮高まる)
1913(大正2)年	連温卿、世界人工語(エスペラント)運動を開始 苗栗事件
1914(大正3)年	(22歳)同志社大学政治経済部選科経済科(専門学校課程)卒業、渡台 第一次世界大戦(—1918(大正7)年) 後藤新平「最近殖民政策」につき同志社で講演 太魯閣番の役、西来庵事件

1915(大正4)年	佐竹音次郎、鎌倉保育園台北支部を大稻埕下奎府町一丁目に設立 蔣渭水、台北市大稻埕に大安医院を開業 「五箇年計画理蕃事業」終了(武力による帰順政策から安撫政策へ)
1916(大正5)年	(24歳)台北市大稻埕港町二丁目 <u>に稲江義塾設立</u>
1917(大正6)年	ロシア革命 民族独立の世界的な潮流 米大統領ウイルソン「民族自決」を提唱
1918(大正7)年	シベリア出兵 米騒動勃発
1919(大正8)年	朝鮮(三・一独立運動)、中国(五・四運動)など各地で反日・独立運動 台湾教育令制定(本島人、内地人の分離教育政策の実施) 田健治郎が最初の文官総督に就任 「内地延長主義」政策を掲げる
1920(大正9)年	施乾、商工課の全台北市民調査で <u>艋舺区域を担当</u> 台湾議会議設置請願運動
1921(大正10)年	私立静修高等女学校(台北市大稻埕)を会場に台湾文化協会創立集会(民族啓蒙運動の高まり)林獻堂が理事長に就任 清水安三・美穂夫妻、北京に崇貞学園を設立
1922(大正11)年	(30歳) <u>艋舺で自廃運動を開始</u> 台湾教育令を改正(本島人と内地人との共学制の導入) 新竹・高雄慈恵院を設立
1923(大正12)年	関東大震災 <u>施乾、艋舺に愛愛寮を設立</u> 台北、新竹、台南、高雄の各州に方面委員制度を設立
1925(大正14)年	治安維持法制定 (33歳) <u>三菱財閥による土地収奪に農民の先頭に立ち闘争</u> <u>施乾『乞丐社會的生活(乞食社會の生活)』、『乞丐撲滅論(乞食撲滅論)』を發刊</u> 賀川豊彦、大阪に四貫島セツルメント設立
1927(昭和2)年	(35歳) <u>社会・文化運動機関紙「非台湾」編集発行</u> <u>無政府主義団体・孤魂連盟を結成</u>
1928(昭和3)年	(36歳) <u>大稻埕下奎府町三丁目に州有地四千四十坪の貸下を受け稲江義塾を移転</u>

	施乾、昭和天皇の即位大典に参加 台湾社会事業協会設立（事務局を 総督府内に設置）
1929(昭和4)年	世界恐慌
1930(昭和5)年	施乾、「下賜金」3千圓を獲得 (38歳)託児所を開始 霧社事件
1931(昭和6)年	満州事変（戦時体制強まる）台湾 文化協会の終焉 (39歳)人類之家、同年以降毎年 紀元節にあたり奨励御下賜金を受 領（各年四百円）
1932(昭和7)年	満州国建国 (40歳)人類之家、台湾社会事業協 会より二千元、恩賜財団慶福会より 千円の補助金を受け七十余坪の講堂 及び教室各一棟の建築に着手し竣工
1933(昭和8)年	施乾、愛愛寮を財団法人に改組（理 事長を金子光太郎として、自身は 常務理事として実質運営）
1934(昭和9)年	施乾、京都在住の清水照子と結婚 嘉義隣保館設立
1936(昭和11)年	台中隣保館設立
1937(昭和12)年	日中戦争の勃発 東勢社会館、彰化隣保館、豊原社 会館、清水社会館設立 総督府「皇民化運動」を推進 「国語家庭」制度（日本語奨励策） を開始
1938(昭和13)年	国家総動員法制定 新竹市方面委員事業助成会社会館 設立
1939(昭和14)年	清水安三・郁子夫妻、北京にセツ ルメント愛隣館を設立
1940(昭和15)年	改姓名（中国姓を廃して日本式の 氏名に改めさせる政策）
1941(昭和16)年	「皇民奉公会」発足、台湾総督長 谷川清が総裁に就任し積極推進 太平洋戦争（-1945（昭和20）年）
1944(昭和19)年	施乾、脳溢血のため急逝(享年45歳)
1945(昭和20)年	ポツダム宣言受諾・降伏
1947(昭和22)年	(55歳)国民党政府より強制帰還 を命ぜられ最後の引揚船で帰国 二・二八事件
1949(昭和24)年	蒋介石率いる中華民国政府、台湾 に撤退 「戒厳令」発令、白色テロ拡大、 中華人民共和国建国
1950(昭和25)年	朝鮮戦争勃発
1955(昭和30)年	(63歳)3月20日永眠

I 稲江義塾の概要

1. 『台湾民報』掲載の卒業式

日本植民地下の本島人（台湾人）を代弁した台湾の代表紙『台湾民報』において、設立から13年目を迎えた稲江義塾の卒業式の様子が次のように紹介されている。

「三月十八日午後一時港町所在の義塾で人類之家の卒業兼修業式及び学芸会を挙行了た。この日列席の父兄、各界来賓を併せ四百名。学芸会は、唱歌、遊戯、対話、演説など計二十種の題目で、その演芸の熟練と精巧は公学校と遜色無し。列席の父兄と来賓は拍手喝采、五時閉会。稲垣は『高等遊民的学校教育』『製造知識階級的浮浪者』に反対し、『萬人労働的労作主義新教育』を実践してきた。開校十三年で、千人以上の不就学の台湾人児童及び台湾語発音の困難な中国人児童を収容している⁹。」

当時の台湾の初等教育は、内地人（台湾在住の日本人）子弟に対し小学校で、本島人（台湾人）子弟に対し公学校で、それぞれ別に行われた。しかし、それは台湾文化の固有性、即ち言語、習俗、道徳、宗教、種々の制度などの生活様式の総体を尊重するためのものでは決してなかった。あくまでも、台湾人に対する公学校教育に定められた原則の主目的は、国語（日本語）の普及にあった¹⁰。台湾総督府文教局が実施した学齢児童就学率調査によれば、1919（大正8）年、内地人子弟は96%と高率であったが、本島人子弟は21%、とりわけ女子が7%（男子32%）と低かった¹¹。こうした時代状況のもと、稲江義塾において、保護・救済でなく自立支援を目的に、男女平等の観点から基礎教育を実践したことは画期的であった。

実際行われた教育の様子について、上記の新聞記事から、稲江義塾には複数の職員がいて定められた教育課程を計画的に実施していたと推測できる。また、稲垣が1927（昭和2）年に自ら編集主幹した機関紙『非台湾』においてもその一端が窺える。「稲江義塾も今日まで十二年間、維持を続け、益々盛んになって行きます。

今日までに約一千名の出身者を出して居ります。現在稲江義塾で働いて居るのは連神旺、呉清海、林子壽の三君で何れも一生けんめいやつて居ります。教師が不足なので、みんなは多数の生徒を受け持ち、尚ほ其の外いろいろ雑用までして何も、かもやつて各自が小言も言わずに働いて居ります。生徒はいつでも百四五十人ぐらゐは居ります。台北在住華僑の子弟で義塾で学び、今上海や厦門や廣東、香港等の各地に帰って居る者も少なくない¹²⁾。稲江義塾には台湾語の理解が困難な大陸からの出稼ぎ華僑の子弟も含まれていた。これらの児童は台湾のあらゆる公教育制度から疎外された子どもたちであった(写真1. 参照)。

戦後、台湾歴史学の権威であり、後述する日治時期の大富豪・林本源家の末裔であった林衡道(1915—1997年)は、1995年、台湾を代表する有力紙『聯合』に次の随筆を寄稿している。「日本統治下の大正10年頃、私はまだ8歳の学童であったと思うが、毎日のように人力車

に乗って人類之家の前を往来していた。そこには着古して破れた衣服を纏った一群の子どもたちが、読書や唱歌、体操などに打ち込んでいた。そのなかに日本人の教師がいて、子どもたちを前に、アコーディオンを奏で歌いながら身体を動かし舞っている姿が今でも記憶に残っている。あのころまだ子どもであった私には、人類之家の意義は分からなかったが、困窮家庭の子どもたちのための私塾であることだけは知っていた¹³⁾。」

2. セツルメント人類之家・児童部

稲江義塾は、セツルメント人類之家・児童部として、児童給食保護、農耕作業、学用品貸与、職業補導講習、児童宿泊、不良少年保護など、セツルメント活動全体との関連で相乗的に機能していた。人類之家の沿革については、台湾総督府文教局『台湾社会事業要覧 昭和六年三月』に、次のように書き記されている。

「大正五年九月十五日設立、稲垣藤兵衛は台



写真1. 1916(大正5)年、創始時の稲江義塾とその児童・生徒及び共労者。稲江とは所在地の大稲埕の別名である。出典：『非台湾』創刊号、1927(昭和2)年3月20日。(澁谷定輔文庫、埼玉県富士見市立中央図書館所収)

北市大稲埕に於ける細民の生活改善並びに人格的接触に依り住民を精神的に感化善導せんと企図し港町二丁目に『セツルメント人類之家』を創設し、隣佑の指導者となり、之を精神的、物質的に向上せしむる為め、事業を社会部及び児童部の二部に分かち社会部に於いては相談、巡回訪問、就職斡旋、失業者及び浮浪者の保護並びに之が教化に努め、児童部に於いては簡易教育の普及と不良少年発生防止の一端として稲江義塾を設け、隣人の子弟にして就学の機会なき者を収容し国民として必要なる初等教育を授けると共に不良少年を収容して之が感化に務む¹⁴。」

また稲垣は、『台湾日日新報』に、「人類の家から(一)～(三)」と題し、続けて寄稿している。「それは人類が凡ての人と互いに愛し合ひ、融け合ひ、一つになり合ふ機会と因縁とを興えていただく坩堝として、神様に導かれて作りつつあるもの。即ち実は神様の裏(うち)から生まれ出て、そして神様によって育てられつつあるものでありまして、そしてそれは従来世間から公学校の補助機関などと誤られて来た事もなくはないが、決して書房義塾、学校などではありません。また教会でもなければ、感化院でもなく、YMCAなどもまったく違います。欧米のソーシャル・セツルメント・ウオーク(社会同化事業)とは形の上ではだいぶ似通う點もあります但其本質においては、全然相違せるものなる事を御承知願ひたい。『人類の家』は『私』は『あなた』で、『あなた』が『私』である。私たちは『あなた』を『私』の内部に育むと共に『あなた』の裏(うち)に『私』を生かさんとするものだ¹⁵。」

人類之家にはエスペラント語(世界人工語)の看板“Domo de Homarano”(人類のあばら家)が掲げられていた¹⁶。この意図について稲垣は『非台湾』において次のように述べる。

「我等は現下の台湾を非とす。而して我等の是なりと信ずる台湾の創建に急ぐ。

我等は台湾を愛す。我等が台湾を愛するは、我等の為に愛するにはあらず。台湾の為に台湾

を愛するなり。

併かも我等は台湾を超えて台湾を愛す。台湾を超えて台湾を愛すとは何ぞや?世界と人類の為に台湾を愛するを謂う。

我等は台湾に生く、併かも我等は台湾を超えて、台湾に生く。

台湾に於ける我等の使命を遂行する事により、世界の改造と人類完成の大業に参翼すべく、此の蕞爾たる一小島に於ける我等の部署に就く者なり¹⁷。」

稲垣はこの宣言を実際の行動として現すべく農民運動や娼妓運動にも参翼し民衆を警醒している。稲垣の戦いの一つに、「名実共に一資本家の農奴になり終わった」竹林問題に対する闘争がある。それは、1925(大正14)年、「台中州竹山郡台南州斗六郡嘉義郡に亘る竹林七千余甲の所有権が完全に三菱の手に移され、現住民二万余人が二百年來祖先より継承せる遺業を失う¹⁸」という事件であった。『近代日本社会運動史人物大事典』には、稲垣が「三菱財閥による土地収奪に抗して、農民の先頭に立って闘った¹⁹。」とある。

竹内信子は、『植民地台湾の日本女性生活史2大正篇』において、1922(大正11)年、芸娼妓自由廃業運動をして台湾に大波乱を起こした稲垣をリアルに描き出している。「六月の初めのことである。『虐げられる姉妹たちへ』と題された自由廃業の宣伝ビラが艋舺遊廓内へ撒かれ、一部は娼妓たちへ郵送された。稲江義塾の塾長の稲垣は、たちまち警察の手で宣伝ビラを押収され、検察局へ送検されてしまった²⁰。」

日本社会事業の父と呼ばれる生江孝之(1867-1957年)は、内務省囑託として台湾を視察した際の台湾社会事業の印象について、次のように後述している。「今日まで殆ど内地人中の誰一人として彼等の中に身を投じ隣保事業を起こし、又は徹底的の同化運動を実施したもののないことは誠に残念の次第である。適々台北市に於いて十数年来一身を捧げて斯業に従事している一内地人あるも、その周囲は彼に加うるに強大な壓迫を以ってし、現在に於いては実に孤

軍奮闘の状態にあるのは気の毒の至りである。彼とは稲垣藤兵衛君その人である。彼は本島人の住居区内に自ら生活し稲江義塾なる私塾を設けて本島人を訓育しつつあったが、数年前より婦人保護事業に手を延ばし娼妓の自廃の援助、又は誘拐されし婦女の保護等を開始してより俄然或る方面の嫌悪を買い、一時は冤罪を被りて拘禁さるまでの難境に直面したとのことであるが、尚好く毅然として其難局に耐え、今尚戦いを続けているやに仄聞する²¹。」生江は折に

ふれ稲垣を世に知らせている²²それは生江が基督教社会事業の本質をめぐって、「其の古きドグマを揚棄して所謂被壓迫階級たる無産階級大衆の解放のために深甚なる関心を有ち、更に進んで之に參與するの覚悟を決めることこそ基督教的社会正義の示命ではあるまいか²³。」と述べたことから、稲垣に対する生江の同感共鳴が窺える。

なお、セツルメント人類之家の事業概要については表2を参照されたい。

表2. セツルメント人類之家 事業概要（事業成績および経費） その1

1929（昭和4）年度	1931（昭和6）年度	1934（昭和9）年度
社会部	社会部	社会部
失業者保護（負傷のため） 3人 延人員 1,035人	相談指導 383件	相談指導 531件
相談指導 324件	医療救護 97件	医療救護 96件
医療救護 157件	浮浪者保護 48人	浮浪者保護 70人
浮浪者身柄引取 63人	職業紹介 215人	宿泊保護 延人員 58,937人
職業紹介 215人	宿泊保護 実人員 103人 延人員 3,237人	婦郷旅費貸与 41件
宿泊保護 実人員 37人 延人員 2,923人 平均79泊	婦郷旅費貸与 38件	婦人保護 26件
巡回訪問 毎日 1回	婦人保護 11件	交渉斡旋 98件
児童部	児童部	児童部
稲江義塾収容児童 178人	児童給食 実人員187人 延人員1,654人	児童給食 延人員 2,621人
不良少年保護 34人	稲江義塾収容児童 164人	稲江義塾収容児童 189人
学用品給貸与 68人	夜間国語講習 28人	夜間国語講習 42人
児童宿泊保護 7人	不良少年保護 36人	不良少年保護 14人
夏季林間学校 1回	学用品給貸与 72人	学用品給貸与 75人
	児童宿泊保護 7人	職業補導講習 9人
		児童宿泊保護 23人
収入	収入	資産
奨励金、助成金 330・00円	奨励金 400・00円	10,800・00円
農園収入 736・19円	補助金 4,000・00円	建物 7,000・00円
寄付金 1,250・00円	農園収入 640・00円	其他 3,800・00円
基金より生じる収入 14・50円	寄付金 1,700・00円	
その他 3,719・50円	その他 480・00円	
計 6,050・19円	計 7,220・00円	
支出	支出	
事務費 282・00円	事務費 150・00円	
事業費 5,768・19円	事業費 1,470・00円	
計 6,050・19円	臨時費（建築費） 5,600・00円	
資産	計 7,220・00円	
5,995・50円	資産 5,995・50円	

出典：台湾総督府文教局「昭和六年三月 台湾社会事業要覧」(351-352)、「昭和八年三月 台湾社会事業要覧」(252-253)、「昭和十年九月 台湾社会事業要覧」(241-242) 永岡正己（総合監修）、大友昌子、沈潔（監修）『植民地社会事業関係資料集 台湾編』2巻、3巻、5巻、近現代資料刊行会、2000年（抜粋表記）。

表 2. セツルメント人類之家 事業概要（事業成績および経費） その 2

1935（昭和 10）年度	1938（昭和 13）年度	1940（昭和 15）年度
社会部	社会部	社会部
相談指導 273 件	相談指導 126 件	相談指導 83 件
医療救護 97 人	医療取扱 29 人	医療救護 27 件
浮浪者保護 54 人	浮浪者保護 29 人	浮浪者保護 24 人
宿泊保護 延人員 6,734 人	宿泊保護 延人員 7,238 人	宿泊保護 延人員 4,365 人
職業紹介 75 件	職業紹介 25 件	職業紹介 84 件
帰郷旅費貸与 52 件	帰郷旅費貸与 378 件	帰郷旅費貸与 143 件
婦人保護 37 件	婦人保護 45 件	婦人保護 22 件
児童部	児童部	児童部
児童給食保護 延人員 2,738 人	児童給食保護 延人員 4,380 人	児童給食保護 延人員 3,916 人
学用品貸与 89 人	学用品貸与 91 人	学用品貸与 6,240 人
稲江義塾収容児童 185 人	稲江義塾収容児童 235 人	稲江義塾収容児童 225 人
夜間簡易国語講習 57 回	夜間国語講習 68 人	夜間国語講習 93 人
職業補導講習 10 人	児童宿泊 34 人	児童宿泊 21 人
不良少年保護 17 人	不良少年保護 45 人	不良少年保護 31 人
資産	昭和十三年度決算	昭和十五年度決算
10,800・00 円	5,235・00 円	10,635・00 円
建物 7,000・00 円	昭和十四年度予算	昭和十六年度予算
其他 3,800・00 円	5,320・00 円	12,234・00 円
	資産 12,500・00 円	資産 69,300・00 円

出典：台湾総督府文教局「昭和十三年十一月 台湾社会事業要覧」（203-204）、「昭和十四年十一月 台湾社会事業要覧」（226-227）、台北州「昭和十五年度 社会事業概要」（134-135）永岡正己（総合監修）、大友昌子、沈潔（監修）『植民地社会事業関係資料集 台湾編』6 卷、7 卷、40 卷、近現代資料刊行会、2000 年（抜粋表記）。
 注：児童給食保護は罹病率・死亡率の低減を目的に保健事業の一環として行われた。なお児童並びに収容保護中の者を自然に親しめ勤労精神を涵養するため農園を経営している。

3. 大稲埕の地域特性

台湾先住民に基督の福音を伝え続けた井上伊之助（1882-1966 年）は、1960（昭和 35）年刊行の『台湾山地伝道記』において、稲垣は「マラリアにかかり一時辞職帰還を許されたが、健康が回復したので再び台湾に渡り、大稲埕の六館街にあったある商事会社の空家を借り受けて稲江義塾の看板を掲げ、台湾人の貧しい就学児童を集めて教えていた²⁴。」と述べている。

日本植民地下の台北は、大きく三つの区域に分かれていた。現在でもこの三区域はそれぞれ固有の雰囲気を保っている。「城内」（現=中正区）は、総督府があり、植民地行政の中核となっていた地域で、内地人が多く住んだ。「艋舺」（現=萬華区）は、台北発祥の地とされる最古

の市街地であった。そして稲江義塾があった「大稲埕」（現=大同区）は台北駅の北側一体の地域である。稲江とも呼ばれ、東シナ海へと流れ込む淡水河のほとりに街が開け、商業・貿易の中心地であった²⁵。当時の本島人の居住形態の特徴について、大友昌子は次のように指摘する。第一は、城内には在台日本人が多く、また中流以上の階層が居住する傾向があった。第二に、台北城外の周辺地域に低所得者が居住する傾向があり、台湾人の低所得層の居住分布は、城外の北町方面（大稲埕）に集中していた。第三に、台湾人の低所得労働者層は階層移動が少なく、世代を越えて貧困生活を再生産し、同じ地域に住み続ける傾向にあった²⁶。

稲垣が稲江義塾を創設する前年の 1915（大正 4）年に、佐竹音次郎（1864-1940 年）²⁷ が

鎌倉保育園台北支部を同地区大稲埕に開設している。佐竹が事前視察で横行する児童人身売買を目撃したときの様子について、益富政助は『聖愛』のなかで次のように述べている。「是より先、大正三年の春、園父は三女花子を伴い台湾に来たが、台湾のところどころで彼等が視たる此地の児童の状態は、彼等にとりては殆ど皆涙の種ならぬはなかった。ああ何ぞ悲惨なる²⁸。」また、当時の『台湾日日新報』の特集記事に、「不良少年が大稲埕に約三百 泥棒しても十四歳未満で罪にならぬが附目——一種の社会問題だ²⁹」があり、同地区の深刻化する児童問題を紹介している。今日でも、大稲埕では、南に隣接する艋舺と同様、狭域的空間に血縁的・地縁的社会関係を累積し、固定的で安定した庶民的な生活構造が保持されている。

4. 稲垣と台湾文化協会

当時、この地区大稲埕は、抗日運動を進める活動家の拠点であった。稲垣は稲江義塾で、台湾文化協会の中核にいた連温卿（1895-1957年）の協力を得て児童にエスペラント語を教えているが³⁰、このことは稲垣と同協会との繋がりを物語る。稲江義塾には、近隣や区内あるいは外から来て援助する篤志家のなかに協会の会員がいて、抗日運動との全体的関連のなかで有機的に機能していた（写真2. 参照）。同協会は、1921（大正10）年、「台湾文化の発達を助長する³¹」を目的に、集会場を大稲埕私立静修女学校（現＝静修高級中学）に一千余名の会員を集め、理事長に林獻堂（1881-1956年）、専務理事に蔣渭水（1891-1931年）を選任して始まった。台湾総督府にとって、政治結社の開設は許容できない問題であった。このため、活動は文化講演会・演芸会・活動写真の開催、時事問題の学習会、文芸会その他各種倶楽部の実施などの形をとるが、しかし、それは「日本の植民地支配に対する批判の喚起」を意図していた³²。

連温卿は、1913（大正2）年にエスペラント運動をはじめ、1924（大正13）年東京で開かれた世界人工語大会への出席を契機に、大正期

社会主義運動の理論的指導者であった山川均（1880-1958年）の影響を強く受ける。そして1927（昭和2）年、台湾文化協会の主導権を掌握するが、山川主義者として排撃され、1929（昭和4）年、協会を除名される³³。

蔣渭水は、「台湾の孫文（台湾孫中山）」、「抗日運動の英雄」と称えられている。彼は台湾総督府医学校を卒業後、1915（大正4）年、大安医院を大稲埕に開業した³⁴。又吉盛清によると、「大安医院の右側には台湾民報の発行所があり、左側には文化書局があった。医院には、台湾文化協会の関係者がたえず出入りしていた³⁵。」とある。1927（昭和2）年台湾文化協会が左旋分裂し、蔣渭水が同時退会した翌年の1928（昭和3）年、稲垣は大安医院の近く（西へ約300メートルの距離）に稲江義塾を移転している。そして、1930（昭和5）年、託児事業を開始し、児童部・稲江義塾の事業拡大を図っていく。蔣渭水には、1922（大正11）年、細民児童の教育施設として文化義塾の開設を計画するが、総督府から不許可にされた、という苦い経験がある³⁶。人類之家・児童部の事業拡大は、病魔におかされ1931（昭和6）年40歳の若さで人生を閉じた蔣渭水の志の実現と繋がっているのかもしれない。また蔣渭水は、1928（昭和3）年、台湾民報発行五周年特集で、協会結成の動機がアジア民族の連盟と人類の世界平和の促進にあったと記しているが、これもまた、人類が幸福になることを願って、ひたすら奉仕の活動を続けた稲垣の思想性と共通する。

II 謎の人「^{いなとう}稲藤」

1. 「稲垣の性格特殊」

井上伊之助は『台湾山地伝道記』において、追悼文「街の奇人、稲垣藤兵衛」を掲載している。「台湾総督府時代、台北大稲埕の一奇人として日本人より台湾人の間で評判が高かった。」「官僚主義一色ともいふべき台湾で、社会主義的な立場に立ち、貧しい者の友となって当局や富豪社会と戦いぬいてきた人だった³⁷。」また、1953年刊行の『台北文物』には「大稲埕特集



写真2. 1930(昭和5)年夏、「民烽演劇研究所」発会式(於現南京西路蓬莱閣)に応募した30余名の研究生と参列する稲垣(前列右から4人目、6人目が連温卿)。東京築地小劇場での2年間の研修を終え帰台した張維賢はその成果と訓練法を台湾に導入すべく設立した。

出典：莊永明「主張『非台湾』的日本怪傑『台湾紀事』上、時報出版社、315ページ。

人物及びその故事」に稲垣に関する記載がある。黄式杰は「怪傑稲垣藤兵衛」と題して、稲垣の人となりや「同情本省人的立場」、「反骨漢」、「正義感」、「毅然」、「反対攻撃」などの言葉で紹介し、「大学卒者にもかかわらず、高い地位に就くことを望まず、人々が最も避け恐れる台湾山地警員の職に志願して臨んだ³⁸。」と稲垣の功績を絶賛している。

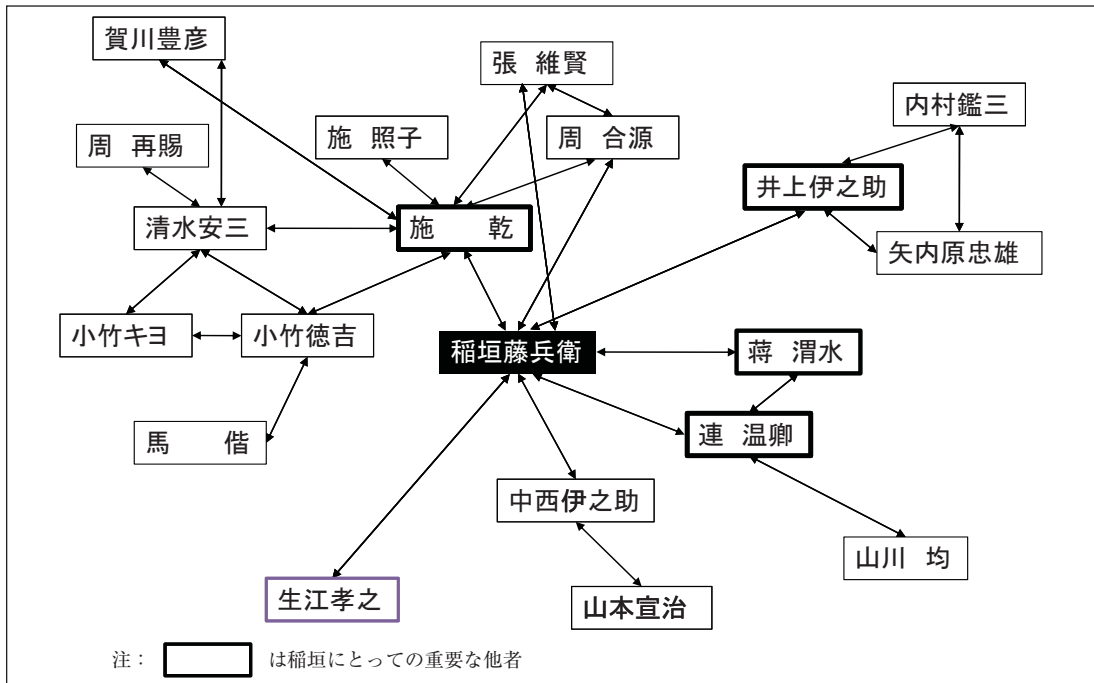
先述の生江孝之は、「純然たる私設隣保事業」として人類之家を積極評価しながらも、「併し彼の行動に対しては之を審らさせざるがため、今俄かに批判を加うことは出来ないが、」と疑問を呈する³⁹。そして岩本秋心に至っては、『解剖せる稲藤』の全頁を通し、稲垣を「偽善者」「危険人物」と痛烈に批判し、「行け！、去れ！、汝須く台湾を退け！。これを以て汝に與ふる最後の一句となす。」と攻撃している⁴⁰。また、総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』に次の

一文がある。「当初稲垣は無政府主義思想の影響拡大のために蔣渭水、連温卿等と提携を図りたるも稲垣の人物を忌避し、蔣渭水、連温卿等は敬遠的態度を執り従って其の指導下の無産青年、文化協会員等は稲垣との来往を好まず次第に之等のグループと離隔するに至れり⁴¹。」さらに、劉峰松によれば、「來台し台中大墩街派出所巡查に就くも上司と衝突し太魯閣蕃討伐隊に編入。」とある⁴²。肯定一否定とその評価は一致しないが、「稲垣的性格特殊⁴³」という言葉が示すように、激しい人であったことは間違いない。

2. 同志社大学卒業生？

稲垣が同志社大学卒業生であるとする記述は、先述の黄式杰⁴⁴をはじめ、莊永明⁴⁵、又吉盛清⁴⁶の著述のなかに散見される。黄は、「同志社大学卒業後、台湾山地服務警員の試験を受け、

図1. 稲垣藤兵衛 人間関係ネットワーク



志願して來台し」と述べる。そして、「国民政府が稲垣を日本に強制送還させて以後、消息は分からない。生きているのかどうか探す術もない。しかし、台湾の貧困児童に対する教育への功績は永遠に不滅である。」と稲垣の消息を気遣うことから、直接のかかわりがあったと推測できる。また、荘は今日の台湾において日本統治時期台湾歴史研究の第一人者であり、又吉は台湾・沖縄近現代史研究の第一人者、沖縄大学教員である。記載の信憑性は極めて高い。筆者も、同志社卒業生名簿及び在籍原簿（同志社大学社史資料センター及び学事課）で確認し、また、台湾基督長老教会鯉鯽教会において、長老を務める陳丁財に対し聞き取り調査を実施している（2005年2月25日）⁴⁷。

しかしながら、井上による先の追悼文には、「明治四十四年頃台湾巡査の募集に応じて渡台した⁴⁸。」とあり、稲垣の卒業年次と井上が記憶する稲垣渡台の時期が4年程一致しない。また、『非台湾』には、「私は無産階級に生まれて、子供の時に学校に行きたくも学校に行けなかつ

た。親は行かせたかったのだが家が困るので行くことが出来なかった。それでろくに文字も知らない。」とある。

これについては今後も究明に努めるが、筆者は稲垣が同志社大学卒業生であることを次のような個々の出来事から類推している。第一は、先述の劉峰松による「來台し台中大墩街派出所巡査に就くも上司と衝突し太魯閣蕃討伐隊に編入。」という指摘である。太魯閣蕃の役とは、総督府が原住民を鎮圧するため、1914（大正3）年5月17日、佐久間左馬太総督が自ら軍隊、警察を率いて発動、8月19日に終結した最大規模の戦争である⁴⁹。この時期は稲垣の「1914（大正3）年、卒業と同時に渡台」と一致する。第二は、『解剖せる稲藤』において「彼は或る神学校を出たと自称している⁵⁰。」という記載があるが、それは同志社を指しているのかもしれない。第三は、稲垣の『台湾日日新報』への寄稿に併せて、当時同志社大学教授であった阿部賢一（1890-1983年）⁵¹が「台日講壇 資本主義的財政と社会主義的財政（一）～（四）」

を寄せている⁵²。第四は、『非台湾』創刊号に基督教社会主義者・中西伊之助（1887—1958年）⁵³の寄稿がある。中西は稲垣の大学卒業時に同志社普通学校を卒業した山本宣治とは同郷の友人である。本庄豊著『山本宣治一人が輝くとき』には、「京都府久世郡横島村（現・宇治市横島町）出身のプロレタリア作家・社会運動家の中西伊之助は、『東京無産党公認中西伊之助選挙公報』（1930年）に『死を以て無産階級のために戦った山本宣治君は私と同郷でありまして、彼のためにも私は甲合戦をせねばなりません』と書いています⁵⁴。」とある。第五は、戦前の同志社には多くの台湾留學生が学んでいたが、なかでも台北の淡水中学（現在の淡江高級中学）との間に、極めて強い関係があった⁵⁵。稲垣とは一年下の神学科卒業生に周再賜がいる。周は大稲埕公学校（現＝太平国民小学）を卒業している。

3. 政治支配との繋がり

稲垣は、社会運動家でありながら、その一方で彼の経歴から政治支配との深い繋がりが読み取れる。例えば、彼は山地警察服務後の1915（大正4）年に台中庁警務課に内勤巡査として勤務するが、その仕事は「警察沿革史」編纂事務であった。そして1916（大正5）年には、総督府内務局社事課で文官業務に服している⁵⁶。同沿革史編纂業務は先住民や漢人の虐殺、凄惨な事件、農民運動や社会運動などに関する高等機密書類に直に触れる仕事であった。また、内務局社事課は、植民地社会事業施策推進の中核機関であった内務局文教課と同一局であり、所属官署は隣接していた⁵⁷。

さらに、朱天心の『古都』には、「林本源家より空き倉庫一棟を借り受け稲江義塾を設立し⁵⁸」とある。林本源家とは、矢内原忠雄（1893—1961年）⁵⁹がその著『帝国主義下の台湾』で「台湾糖業帝国主義」と批判した台湾屈指の富豪である（本島人林家も内地人資本家によって会社経営の実権及び会社利潤を搾取されてしまうのだが）⁶⁰。そして、『台湾社会事業要覧 昭和六

年三月』には、「昭和三年七月下奎府町三丁目州有地四千四百四十坪の貸下を受け一部を農園とし、其他は目下敷地地均し及び舊建物を取除中にして、昭和五年より託児所を開始の予定なり⁶¹。」とある。

また、総督府による情報統制、新聞紙新規発行の許可主義、出版物に対する事前検閲の制度のもとで、稲垣の活動が『台湾治績志』⁶²及び『台湾日日新報』に掲載されているが、一方の『台湾治績志』は統治官庁が施政「成果」を顕彰するため刊行された書冊であり、他方の『台湾日日新報』は総督府、地方官庁の広報類を附録することによって金銭を得たため「御用紙」と本島人の中で揶揄された日報である⁶³。

4. 基督者としての背景

サマリア人、娼婦、生活に追われ律法を守る余裕のない地の民と一緒に食事していたイエスのように⁶⁴、稲垣の働きは基督者の信仰に基づく実践であった。しかし、稲垣は最初から「信仰的生活態度」が真実であることを証明するため、渡台した人ではなかったように思う。調べるほど、それは違うという思いが強くなる。

彼の生き方は、はじめから目標を設定しておいて、単一方向的に直進する“弾道ロケット型”のそれではない。稲垣を、直線的（線形的）に捉えるよりも、人生がそのつど修正・更新されながら螺旋状をたどる観点から捉えたほうが適切である。留岡幸助や山室軍平をして社会事業に一路躍進させたものが、「とりわけ新島襄のキリスト教主義教育の学校、同志社で学んだことによる」とするのなら⁶⁵、この意味（こうした歴史の書き方）において、稲垣は「同志社が生み出した社会福祉の先駆者たち」とは違っている。筆者には、稲江義塾が「新島先生の人格と主義主張」によって生み出されたとは思えない。筆者はむしろ、稲江義塾創設の直接的な契機は、無教会宣教師・井上伊之助との出会いにあるのではないかと推測している。

稲垣は井上をして「台湾時代の無二の友人」といわせている。「君とわたしは仕事も違い、

思想も一致していないこともあったが、キリスト教に立脚した人道主義には同感共鳴していたので、時に面会して議論もし寝食を共にして兄弟の交際をつづけておった⁶⁶。」

井上は高知県で生まれた。聖書学院在学中の1906（明治39）年、台湾の花蓮で父が「生蕃」によって殺されたのを機に、山地伝道を志す。医術を学び、1911（明治44）年に渡台する。以来、引き揚げの1947（昭和22）年まで医療に従事しながら基督の福音を各地の原住民族に伝え続けた。「偏遠醫療宣教歴史見證文化館」（台湾南投縣魚池郷）には、「1911. 12. 日人井上伊之助醫師來至台灣，從事山區醫療傳道台灣各地為原住民服務」とあり、井上の功績を公開している。矢内原忠雄は、井上を「台湾山地伝道の父—日本のシュヴァイツァー」と称え⁶⁷次のように述べる。「領台後渡來せる我が神道仏教及び基督教はほとんど凡て在住内地人にのみ関係し、その活動は本島人生蕃人に及ばないのである。」「稀に井上伊之助の如く高山蕃人に対する基督教伝道の篤志家出ずる⁶⁸。」井上の信仰の師である内村鑑三（1861-1930年）は、井上の『生蕃記』発刊に際し序を寄せている。「私の知る範囲に於いて君は台湾生蕃の靈魂救済をその生涯の事業として居る唯一の日本人である。君の父君は台湾で製腦業に従事中生蕃人の殺す所となった。そして君は日本人として父の仇を報ゆるの心をもって、生蕃人救済にその一生を委ねられたのである。まことにキリスト信者らしき復讐の方法であって、かくあってこそ救霊の効果は挙がるのである⁶⁹。」

それでは一体、稲垣と井上の最初の出会いはどこなのか。彼は1914（大正3）年の山地警察服務として太魯閣蕃（花蓮木瓜溪上流及び立霧溪上流一帯）の役に動員されて後、1915（大正4）年、台中庁警務課に内勤巡査として勤務するが、井上は1911（明治44）年から1917（大正6）年の間、新竹州庁樹杞林支庁カラパイ蕃人療養所に事務囑託として勤務している⁷⁰。台中と新竹は隣接しており、カラパイの地は太魯閣とは至近の距離にある。またカラパイは井上

の父を殺したタイヤル族の土地であった。また彼は稲垣への追悼文の後に、「私はタイヤルを愛している」という自作の詩を掲載している⁷¹。とすれば、両者が親交を結ぶ発端はこの地ではなかったか。

植民政府の「理蕃政策」は、「撫育」という名目のもとに駐在所を設置し、山地資源を掠奪することを目的とした⁷²。こうした状況にあって、井上は、「家族をよびよせ、タイヤル語を習得し、彼らの宗教、人情、風俗を知り、真に彼らの生活にとけこんで、あらゆる機会をつかんで福音宣教の使徒たらんと願った⁷³。」大学を卒業したばかりの若き稲垣にとって、この井上の姿勢は強烈に新鮮なものとして映ったに違いない。と同時に、それを秀逸なものとして意識するほど、総督府の差別的な政策に付き従う植民地下級官吏としての自己の矛盾を意識せずにはおられなかった、のではないか。

とすれば、稲垣は、実践の直接的な契機を“同志社建学の精神”、“同志社人としての誇り”に希求する、いわゆる“同志社人物列伝”の傘下（フレーム）に組み込まれてしまうような存在などでは決してない。むしろ、一方的に設定されたようなフレームから、私たちが自由（リベラル）な精神をもって解き放たれるとき、彼の主体的かつ個性的な生き様が見えてくる。

Ⅲ 救護施設「愛愛寮」創設者・施乾

1. 施乾とは

施乾（1899-1944年）とは、1923年、台北市艋舺大理街に路上生活者の救護施設「愛愛寮」を創設した台湾の代表的社会事業家である。彼は、1899（明治32）年、日本植民地下の台北州淡水で生まれた。1912（大正1）年に淡水公学校を卒業後、1914（大正3）年から1917（大正6）年まで総督府工業講習所に学び、そして1919（大正8）年、総督府商工課の技師に就任した。在職中、諸書耽読し、西田天香、賀川豊彦の学説に心酔する。1920（大正9）年、商工課の全台北市民調査で艋舺区域を担当することになるが、そこで貧困に喘ぐ人びとの実態を目

のあたりにする。当時、台北市には私立の「乞食寮」が三箇所（大稻埕鴨寮街、艋舺龍山寺街、学海書院邊街）あった。しかし植民地化によって制度が弛廃して、「乞食」たちは「流離失所曝露於風雨之中」となっていた。こうした状況の下、施乾は「乞食寮」の創設を発心する。

施乾は叔父の施煥に対して父施倫の説得を頼み、さらに数百元の開設費用を請う。施合發木材行を営む伯父の施坤から材木の寄贈を受ける。そして、1923年、少しばかりの土地を購入して、簡素で狭い板屋を一株こしらえ、12人の職員を雇用し、20数人の「乞食」を収容して愛愛寮がはじまった。施乾は1925（大正14）年、「乞丐撲滅論（乞食撲滅論）」、「乞丐社會的生活（乞食社會の生活）」などの著書を発刊し、1926（大正15）年、「乞丐撲滅協會」を組織する。

1933（昭和8）年、事業の最大の協力者であった妻謝惜が急逝により、施乾は幼子二人（後に愛愛院の活動を支える長女明月と次女美代）を抱え途方にくれた。そして、1934年、京都在住の清水照子（1910-2001年）と再婚するが、志し半ばで、1944（昭和19）年、脳溢血のため急逝（享年45歳）する。戦後、施（清水）照子が夫の遺志をついで、弱者救済に尽力した。その後、時代の推移とともに高齢者施設として再編され、現在、長男施武靖（1942年—）が、台北市私立愛愛院として安老所（養護老人ホーム）、養護所（特別養護老人ホーム）、自費安養中心（健康型有料老人ホーム）などの居住施設（入居者約120名）を設置・運営している⁷⁴。

1994年、台北県立文化センターは王昶雄を編者に『孤苦人群録』を出版した。同書は、植民地時代の北台湾文学（散文、詩文、評論、詩、小説など）縣籍名家14人作品16冊のうちの1冊であり、評論集として施乾の「乞丐是什麼（乞食とは何ぞや）」、「乞丐撲滅論（乞食撲滅論）」、「乞丐社會的生活（乞食社會の生活）」などの著作が納められている。編者の王は、「編輯導言（刊行に寄せて）」のなかで、日本文豪菊池寛が日本へ持ち帰り広く世に知らしめたほどの大作であった、と施乾を絶賛している。また、「施

乾及其事業」において、賀川豊彦の学説を踏まえた科学的実践であったと賞賛している⁷⁵。

2. 基督者としての背景

施は無教会主義の基督者であった⁷⁶。中村孝志は「小竹徳吉伝試説—台湾のバスターロッター—」のなかで次のように述べている。「小竹が淡水公学校長時代の生徒施乾は、台湾最初の福祉施設『愛愛寮』を台北艋舺に設立したが、これなどは或いは小竹の指導的影響があったと考えてよいのではないかと思われる⁷⁷。」

小竹徳吉（1876-1913年）は敬虔な基督者であった。台湾人とりわけ台湾原住民の人たちへの教育に尽くしたことで知られている。彼は、1898（明治31）年、台湾総督府国語学校師範部を卒業と同時に1901（明治34）年まで大稻埕公学校（現=太平国民小学）教諭を努めた（当時の生徒に周再賜がいる）。そして、1907（明治40）年から1910（明治43）年の間、滬尾（淡水）公学校校長として業績を残す。1908（明治41）年には、清水安三の姉、清水キヨ⁷⁸と結婚し、その後、1910（明治43）年には厦門旭瀛書院初代院長として赴任するが、1913（大正2）年に38歳で台北にて病没する。施乾は淡水公学校（現=淡水国民小学）に1906-1912年の間在学した。つまり、施は小竹校長のもとで、8歳から11歳までの多感な子ども時代を送ったことになる。

小竹は清水安三（1891-1988年）の義兄である。清水安三は、宣教師として中国にわたり、1920年、北京朝陽門外のスラムに学校（崇貞学園）を開設し、そして、賀川豊彦（1888-1960年）の協力で1946年、桜美林学園を創立した人物として知られている。この清水安三の愛愛寮訪問について、王昭文は「拯救乞丐的社會改革者—施乾」のなかで、「1928年の菊池寛による訪問よりも前、清水安三牧師が台湾視察をした際に、愛愛寮の物語と彰化基督教医院『切膚の愛』の物語（蘭大衛医師が妻の皮膚を負傷した児童周金耀に移植して救助した）を聴き訪ね、これに感動して帰国後、報道して、愛愛

寮の活動に対する日本社会の関心を高めた⁷⁹。」と述べている。

ところで、筆者が淡水国民小学を訪問した際(2005年2月25日)、校長を務めていた蕭憲誠は次のことを繰り返し述べている。小竹徳吉は、カナダ長老派宣教会の台湾最初の海外宣教師・馬偕(George Leslie Mackay 1844—1901年)⁸⁰を尊敬し、生徒たちに彼がはじめて淡水に入港した時の言葉、“*No other labor ever before me* 佇我前頭猶未有工人佇遮做工”(「1872年3月9日船入淡水港」『馬偕日記』)を繰り返し唱えることによって、先駆者精神を奨励していた。

IV 稲垣藤兵衛と施乾との近似性

1. 実践する基督者

稲垣と施は何故、誰もが見向きもしなかった社会の「最底辺」を志向する実践へと駆り立てられることになったのか。

一方の稲垣が台北市大稲埕に稲江義塾を創設するのが1916(大正5)年、他方の施が大稲埕に隣接する艋舺区域に愛愛寮を創設するのが1923(大正12)年のことであるが、ちょうどこの時期は1921(大正10)年の台湾文化協会の誕生を契機として社会改革運動が隆盛にむかう時期であった。稲垣は次のように述べる。「私は其の時、台湾人たちの有様を見て、『民は牧ふ者なき羊の如し』と聖書の句を思い起こし、たまらなくなつて台湾人の間に身を投ずべく、この大稲埕に入ったのであった⁸¹。」施が街路に噴出する貧窮者の社会的な惨状を無視できなかったように、社会構造的な矛盾に向かって高揚する若き感情が稲垣をして先駆的社会事業へと突き動かさせた。

1914(大正3)年、山地警察服務の当時、稲垣は路上に倒れた台湾工人を見兼ねて助けに行き、上司に背いてまで軍隊救護所に介抱を談判し、軍紀冒犯となっている⁸²。

施が敬服して止まない信仰の師、賀川豊彦は、善いサマリア人の譬え(ルカによる福音書10章25-37節)から、「非宗教的宗教運動の意義」[所謂宗教生活の虚偽]について語っている。「即

ち、マタイ伝二十五章三十一節以下の教える所は、所謂『宗教的』なることが、実際は、宗教的でなく、返って『非宗教的』と考えらるる、弱者貧民をいたわり、前科者、行き倒れに衣食住を与え、世人のあわれみの目からも漏れたような窮民の為に小さい情をかける。それが本当の意味で宗教的生活と称すべきものであると云うのである。我々はこの点について、明確に真の宗教生活が何であるかを理解する必要がある⁸³。」この観点に立てば、稲垣は真の宗教生活を実践する基督者といえるだろう。

王昭文は次のように述べる。「愛愛寮の基本構想、即ち「同食同寝」(「引導乞丐人重拾人的尊嚴」「我是要你們技術・讓你們有能力」)は、賀川豊彦の貧民窟活動経験によっている⁸⁴。」稲垣もまた本島人細民との関係をめぐって徹底した寄り添いを貫いた。稲垣は言う。「救済事業とか云ふやうなものではない。私共の立場は人に慈善を施すとか他を救済するとか云ふのではなく、却つて共に恵まれ祝福され癒される立場である。人に対する関係ではなく神に対する関係にあるのである。」「キリストが其弟子の足を洗はれて『我は爾らの師または主なるに尚なんぢらの足を洗ふ、汝等もまた互いに足を洗ふべし』と仰せられた其御手本に倣はせていただく道場です⁸⁵。」

2. 無政府主義団体「孤魂連盟」の結成

施は1925(大正14)年の『台湾民報』に、「乞丐底問題」と題して、「最底辺の問題を最重要の解決課題として取り組まなければ、台湾は『麗島:Formosa』から『醜島』になる⁸⁶。」と述べる。稲垣は1927(昭和2)年創刊の『非台湾』に、「我等は現下の台湾を非とす。而して我等の是なりと信ずる台湾の創建に急ぐ」と宣言するが、そこに施乾は「祝発刊萬華愛愛寮施乾」と一文を寄せるなど、社会改革への志向をめぐって両者には接点がある。そして同年、共に「孤魂連盟」を結成することから、無政府運動で結びつく関係を知ることができる。

総督府警務局『台湾総督府警察沿革誌』によ

れば、「孤魂連盟」とは、「本島人の教化を標榜し、稲江義塾を経営しつつありし無政府主義者稲垣藤兵衛の主唱に基づき本島人無政府主義者を集めて組織せる研究会グループの名称のこと⁸⁷⁾とある。中心会員の一人、台湾新劇の第一人者・張維賢は大稲埕民衆講座で同連盟の趣旨を次のように宣言した。「孤魂とは生前孤独にして死後寄辺なき憐れむべき靈魂の言うなり、其の悲哀は恰も吾人无産階級農民の現代に於ける生活と異ならず、吾人は茲に孤魂連盟を組織し我等の光明、無産階級解放運動に進出せんとするにあり⁸⁸⁾。」

施乾と張維賢、周合源という全く違う分野の文化青年が無政府主義運動で結びつき（写真3.参照）、張維賢の星光演劇研究会は愛愛寮の募金のために公演を行うなど連盟は台湾民衆からも注目された⁸⁹⁾。しかし、稲垣と施との結びつきは、必ずしも堅固な関係ではなかったようである。先述の警察沿革誌には、「台北市萬華の博愛園愛々寮主施乾は寄付金募集に関し周合源、

稲垣等と相織り孤魂連盟の趣旨に賛同して之に参加せしが、稲垣の放任的態度を執りたる以後、孤魂連盟は施乾方に実権を移したるかの観さえありたり⁹⁰⁾。」とある。1928（昭和3）年、孤魂連盟は取調べと家宅搜索を受け一年という短さで事実上消滅している。

3. 体制への協力者

稲垣は総督府内務局社事課で、施は殖産局商工課でそれぞれ役人として服している。施は、1928（昭和3）年に昭和天皇の即位大典に参加するなど、体制とのかかわりを深めていった。同年から、毎年「下賜金」が給付され、これに続いて、日本人が組織する各種慈善団体（恩賜財団明治救済会、財団法人台湾婦人慈善会、恩賜財団慶福会など）から補助を得て、授産室、精神病棟などを設置している。以降、特頒賜金を得て、経営は軌道に乗り出す。この過程で、施は、1933（昭和8）年、愛愛寮を財団法人に改組して台北州会議員で弁護士の金子光

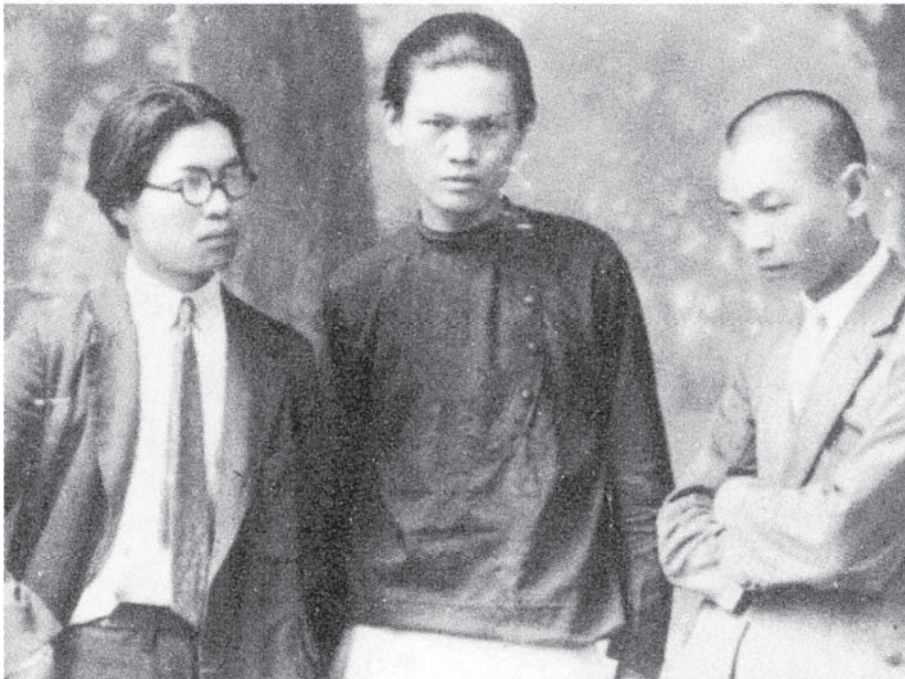


写真3. 当代三大「乞食頭」(最底辺の人々に徹底して寄り添うという意味)。右から、施乾、張維賢(別名 張乞食)、周合源。
出典：莊永明「台湾新劇第一人」『台湾紀事』上、時報出版社、423 ページ。

太郎⁹¹を理事長に、台北州会議員で元台北警察署長の近藤満夫を常任理事に迎え組織の強化を図っている。また、1942（昭和17）年には地元行政区緑町区長及び青年団長に選任されている。

先述の王昭文は次のように述べる。「実践の師と仰ぐ賀川豊彦が社会運動の路を歩んだけど、施乾は愛愛寮の活動に全力を投入した。これは植民地下台湾の特殊な社会状況に起因するのかもしれない。当時、植民政府は、台湾人を監視し暴力で抑えつけ、反抗の芽を容赦なく摘み取った。したがって、社会運動による改革の可能性はゼロに等しかったのである⁹²。」しかし、植民政府総督府の下に組み込まれざるを得なかったというよりも、積極的に関与したという印象は否めない。

稲垣にも同様のことが指摘できる。1930（昭和5）年、台湾社会事業協会主催の第一回「児童節」において児童権益の重視を総督府の方針として決定するが、それは「児童国家財産化」観念の浸透を意図したものに他ならず、この年、稲垣は稲江義塾に託児所を設置している。これなどは施政方針に即応する形での事業展開といえるだろう⁹³。

稲垣もまた、1931（昭和6）年以降、毎年紀元節にあたり奨励御下賜金を受領している。そして1932（昭和7）年には、台湾社会事業協会、恩賜財団慶福会より補助を得て七十余坪の講堂及び教室各一棟を建設している⁹⁴。『台湾社会事業要覧 昭和十四年十一月』に掲載された「皇室と本島社会事業」をみると、「大正十二年以降、毎年紀元節に際しては、私設社会事業御奨励の思召を以て御下賜金を賜い、本島に於いて此の有難き光栄に浴したる団体八十一に及び⁹⁵」とあるが、それはごく限られた一部の「優良私設社会事業」に対する下賜であった。とすれば、稲垣もまた国家権力の手厚い庇護の下ではじめて社会事業経営を可能とした、といえようか。

V 「稲藤」に対する台湾の評価

1. 全面肯定派

日本統治時期に関する台湾歴史研究の第一人者・莊永明は『台湾慈善四百年 清領編、日治編、戦後編』のなかで、木村謹吾と共に稲垣藤兵衛を、本島人のために義行と熱情で貢献した「真愛台湾」の実践者として全面的に評価している。木村謹吾とは、1917（大正6）年、台北市大稲埕北門外街木村胃腸病院内において私立台北盲啞学校を創設し、障害のため公教育への就学機会を持たない内地人及び本島人の児童に無月謝で基礎教育を、また困窮児童には寄宿舎や昼食料等を提供した人である⁹⁶。1928（昭和3）年、台北州立台北盲啞学校として台北州に移管後も校長を務めた。戦後、学校形態の変遷を経て、現在、台北市立啓明学校及び啓聰学校として発展している。

莊の記述には、木村、稲垣とも、免費教育を与えられた児童の大成に関する情緒的な記述が共通している。稲垣をめぐっては、台湾の代表的近代画家・洪瑞麟を挙げ、「稲垣の人道主義及び基督教的な啓蒙がその後の『悲天憫人』（世の乱れを悲しみ、民の困窮を哀れむ）的な芸術の創作に影響した⁹⁷。」と述べる。洪瑞麟（1912-1996年）とは、帝国美術学校西画本科を卒業して1938（昭和13）年に帰台後、鉦工画の分野を開拓した人であり、坑内工作中、日本貧民窟、鉦工入坑等の作品がある。

内地人（日本人）による社会事業の傾向は、内地人を対象にしたもの、あるいは本島人に対して「国語（日本語）教育」を与えるものが主流であった。この点からも、稲江義塾は特異であった。1930（昭和5）年まで稲江義塾から至近にあった鎌倉保育園台北支部は、その活動を本島人細民子弟の託児から、本島人子弟のための日本語教育へと性質を変えていくが、それは「台湾人が日本人の学校に入る⁹⁸」ための教育であった。1917（大正6）年、内地人と本島人幼児の共学会事業（統合保育）として、愛育幼稚園を開設し、1921（大正10）年には同

幼稚園児余暇指導の愛育舎を発足させ、日本語教育の成果向上に重きをおいた⁹⁹。そして同支部は、「昭和五年城内佐久間町に移転し、昭和七年託児所の一部を艋舺新富町に移転し、之を幼児の園と称する」が、幼児の園の1931（昭和6）年度事業成績をみると、「内地人四十人、本島人六人、朝鮮人一人 計四十七人」となっている¹⁰⁰。ここから、事業の対象が次第に内地人子弟に移行していったことが推測できる。このためか、筆者の知る限り、今日の台湾において、鎌倉保育園台北支部がしるした足跡が語り継がれることは皆無である。

戦前台湾の社会事業最前線に生きた人びとの多くは、台湾人子弟の国語（日本語）教育にあたってきた。台湾からみれば、彼らは台湾人の総日本人化を目指した「皇民化教育」の尖兵ということになる。周婉窈は近代化と植民地化を同時に招来した日本統治の本質をめぐって、問題提起している。「植民地統治がいかに豊富な遺産をとどめたにせよ、近代植民地統治の遺した最大の傷痕は、おそらく、植民地人民から彼ら自身の伝統・文化や歴史認識を剥奪し、『自我』の虚空化・他者化を招いたことであろう。これは植民地において最も癒されがたい傷痕なのである¹⁰¹。」こうした状況のもとで、稲垣は、国家への絶対化を拒みながら、そこからの解放を実践の根底に置こうとした。この姿勢が台湾の人々の共感を呼ぶのだろう。

2. 現象・表層肯定、本体・本質否定派

国立中正大学社会福利学系副教授の呉明儒は、稲垣の社会事業の特徴を「最早期的台湾社区組織」という言葉で台湾におけるコミュニティ・オーガニゼーションの歴史的起点と位置付け、当時の植民地社会事業政策としての隣保館事業との違いを指摘している¹⁰²。

総督府成徳学院（少年感化教育施設）院長であった杵淵義房は、『台湾社会事業史』のなかで隣保館事業の時系列的な段階・過程について次のように述べている。「台湾に於ける隣保館事業は、大正五年九月稲垣藤兵衛が台北市港町にセツルメント人類之家を創設したのを以て嚆矢とする。越えて昭和九年五月には、台南州嘉義市に嘉義隣保館が設置され、次いで台中州に於いては、昭和十一年乃至同十二年の間に於いて、台中隣保館（台中市）、東勢社会館（東勢街）、彰化隣保館（彰化市）、豊原社会館（豊原街）、清水社会館（清水街）の五機関が相前後して設置された¹⁰³。」人類之家が個人経営（民間施設）であるのに対して、上記の隣保館（社会館）は街（基本的な行政単位で現在の鎮、郷）などの行政区や各市の方面委員事業助成会が運営する公設・準公設の施設であった（表3. 植民地下台湾の隣保事業 参照）。この点において、個人経営である人類之家は特異であった。生江孝之は、総督府の委嘱で地方巡回講演をした際の社会事業の印象について、「公設及び準公設の事業が極めて多く」、「台湾に対し純然たる私設隣保事業の設立を切望する」と後

表3. 植民地下台湾の隣保事業

名 称	設立年月日	所在地	経 営 主 体
セツルメント人類之家	1916年9月15日	台北市	個人
嘉義隣保館	1934年5月1日	嘉義市	財団法人嘉義博愛会
台中隣保館	1936年12月15日	台中市	財団法人台中市方面委員事業助成会
東勢社会館	1937年2月15日	東勢郡	東勢街
彰化隣保館	1937年5月29日	彰化市	財団法人彰化市方面委員事業助成会
豊原社会館	1937年7月3日	豊原郡	豊原街
清水社会館	1937年11月13日	大甲郡	清水街
新竹市方面委員事業助成会社会館	1938年9月1日	新竹市	財団法人新竹市方面委員事業助成会

出典：台湾総督府文教局「昭和十四年十一月 台湾社会事業要覧」永岡正己（総合監修）、大友昌子、沈潔（監修）

『植民地社会事業関係資料集 台湾編』2巻、近現代資料刊行会、2000年、250-256ページ（抜粋表記）。

述している¹⁰⁴。

1931(昭和6)年の満州事変を契機に戦時体制が深まり、時代の潮流は、同年「部落振興運動」、1936(昭和11)年「民風作興運動」、1937(昭和12)年「皇民化運動」、そして1941(昭和16)年「皇民奉公運動」へと、国家総動員の体制を強めていく¹⁰⁵。総督府は、地域という単位で、集会所を設置し、中堅人物の育成と組織化の進展を必要とした。官主導の「睦隣組織運動(セツルメント)」は、地域レベルで官僚制の浸透を図る一つのモデルケース(実験例)であった¹⁰⁶。こうした困難な状況にあって、稲垣は独りセツルメントを、台湾人が自ら抵抗する貧民としてのアイデンティティを獲得していくための自治・自発的な運動として位置付けた。それは、内地の隣保事業が目標とした「遂に貧民窟を脱して独立せる立派な市民になること¹⁰⁷」、つまり社会教化事業ではなかったのである。

このように稲垣の社会事業を現象・表層的に積極評価しながらも、しかしそれは本体・本質的には植民地支配の主要推手としての域を超えるものではない、とする見解を持つ論者がいる。国立中山大学社会科学学院副教授の李天賞は、人類之家を「台湾最早」の「社区発展」(コミュニティ・ディベロプメント)「社区組織」(コミュニティ・オーガニゼーション)と位置づけ、今日の県、市・郷で実践される社区発展協会の起源であると評価する一方で、それは植民地化のための日本式の近代化(近代西欧文明の模倣)であると異議を唱える¹⁰⁸。台湾大学社会学系教授の林萬億は、人類之家を皇民化推進のため1930年代後半に集中して設立された公設、準公設の隣保館と比較して、「是一個睦隣組織(social settlement)」という言葉でその根本的な差異を指摘する。しかしその一方で、総督府が統治の仕組みとして民間社会事業を植民地行政に組み込む過程で、人類之家もまた支配政策としての社会教化機関へと変質したと述べる¹⁰⁹。

真理大学台湾文学資料館館長の張良澤は、稲垣の教育者としての先駆的事業展開に注目する¹¹⁰。そして国史館台湾文献館前館長の劉峰

松も、人類之家が稲江義塾を中心に発展したこと、戦後それが林慎(台湾省婦女工作指導委員会)によって所有され、「協進幼稚園」として継承されていることを紹介している¹¹¹。しかし、その一方で、1898(明治31)年、熊本県人兼松磯熊が大稲埕建昌街に設立した『稲江義塾』と『地点相同(一致)』両者の関係は如何に? ¹¹²と、稲垣と総督府との繋がりを疑う文面になっている。なぜなら、兼松磯熊が経営した同義塾の会員に、台湾語学習が日々の職務に直結する総督府、公学校、裁判所、警察に勤務する人々が名を連ねていたからである。

3. 全面否定派

この立場に立つ代表的論者は国立空中大学社会科学系副教授の李健鴻である。彼は『慈善與宰制 台北縣社会福利事業史研究』のなかで、内地人による社会事業のすべてを「恩侍福利体制」という言葉で否定し、それを次のように特徴づける。①日本皇室による恩沢の強調とそれに対する台湾人民の感懐(心に抱く思い)と仁徳の心の表現、②恩賜の儀式と監督制御、すなわち「恩」と「威」による統治、③皇室の代理在台湾機構としての各種恩賜財団の位置づけと社会事業行政主管機関の仲介調整による民間団体への恩賜金の分配給付、④施助者と受助者の「恩賜」と「従順」の序列化された階層秩序による社会騒動不安の抑制¹¹³。

そして、この「恩侍福利体制」の浸透は、結果として、内地人の社会事業に傾斜する「民族差異による福利資源不平等分配」を引き起こす¹¹⁴。稲垣が州政府から借り受けた四千余坪の敷地は元来本島人の土地であったことは言うまでもない。この観点に立てば、稲垣の人類之家は、もともと存在した台湾人の共同体の上に外来のセツルメントを被せた二重構造でしかなかったことになる。当時日本のセツルメント研究の第一人者であった大林宗嗣は、セツルメント運動が持っている社会改良のエネルギーについて次のように指摘する。「その利用方法の如何に依っては有産支配階級の自己擁護の為の

手段となることが出来るが又それと同時に無産階級が自己を擁護し又自らの階級の利益を助長し且つ発展せしめる手段ともなり、更に進んで無産階級が階級なき社会を建設完成せんが為の行程に於いて極めて有力なる手段ともなり得る¹¹⁵。しかし、抑圧される側の台湾の人々からすれば、それは支配階級の自己擁護のための手段（台湾に対する侵略の一環）にしかすぎず、他民族による植民地支配という状況の下では、無産階級が自らの階級の利益を発展させるための有力な手段とはとてもなり得なかったのである。

おわりに

稿を括るにあたり、今後の検討課題を二点指摘したい。

第一に、稲垣の社会事業実践は基督者であることが基盤に在ることを忘れてはならない。稲垣は『非台湾』を次の言葉で括っている。「みな神様のお助けにより助けていただいたのであります。神様がお助けくださいませんなら人間には何も出来るものではありません。」サマリア人、娼婦、生活に追われ律法を守る余裕のない地の民と一緒に食事をしていたイエスのように（マタイによる福音書9章11—13節）、彼の働きは基督者の信仰に基づく実践であった。

しかし、これ程までの人物が社会事業の先駆者としてなぜ世に出ないのか。これに関して、山折哲雄の賀川豊彦についての記載がヒントを与えてくれる。「賀川は色々な分野に手を出した人です。しかも教養・知識のレベルで手を出したにとどまらず、運動にまで行ってしまう人でした。労働運動、農民運動、消費者協同組合運動、幼児教育、信用組合など、その多様性と広がりとはほんとうにたいしたものですよ。」「こういう流儀の人物は批判しやすいのではないかと思います。一つの領域で専門的に研鑽を積んで、その道だけを一貫させる、そういうあり方を選ばなかった賀川は批判されやすい¹¹⁶。」稲垣についても同様のことが言えるのではなからうか。

永岡正己は基督教福祉史研究の課題の一つに、「社会的評価とは別の位相でキリストの光の下

に照らされる実践者の存在をどう捉えるか（キリスト者の実践は、そのような分析の深さを求めている）」を挙げている¹¹⁷。この重要性を確認したい。

第二に、台湾の今日的な社会・政治情勢の変化を凝視しなければならない。日本統治下台湾の社会事業史に対する意味付けは政情により微妙な変化をみせてきた。愛愛寮の創設者・施乾は同郷で淡水公学校の後輩でもある李登輝元総統により世に出されたという側面がある¹¹⁸。稲垣にしても民主化の過程で社会運動家・連温卿への注目に併せ浮上したという側面は否めない。稲垣に対する台湾の評価は流動的である。こうした状況のもと、それを“日本人の視点”から掘り起こし、比較照合することは、相互理解を深めるうえで意義深い。

筆者は大稲埕の長老である楊東興の案内で何度か跡地を訪ねている。日本統治下、そこが「貧民窟」であったことは容易に想像できる。しかし、稲江義塾の面影は今は無い。跡地の一画を公園が占め、他は、家と家とが密集した状態で多数の人びとが群がり住んでいる。稲垣は、時代の流れに翻弄され、ころごし半ばにして離れざるを得なかった。彼は「無念なおもい」、「悲惨」というものを背負う人であった。また彼は抑圧された貧しい人々のもつ感性をもっていた。だからこそ稲垣は基督に近い存在だったと思う。稲垣は最初から「信仰的生活態度」が真実であることを証明するため、渡台した人ではなかったように思う。調べるほど、それは違うというおもいが強くなる。その信仰は現実の血と涙の実践から、より真実なものに深まっていったのではないか。

稲垣藤兵衛は、「同志社が生み出した社会福祉の先駆者たち」とは違っている。筆者には、稲江義塾が「新島先生の人格と主義主張」を標榜する“同志社”によって生み出された、とは思えない。いずれにしても、稲垣には、“同志社建学の精神”、“同志社人としての誇り”をモチーフにした“同志社人物列伝”という歴史の書き方が馴染まない。筆者の心を引き付ける彼

の力はそこにあり、この特徴を備えた人こそ「同志社人」であると思う。

注

- 1 次の拙稿を参照されたい。「忘れられた同志社人—台北市大稲埕『人類の家』創設者・稲垣藤兵衛—」『同志社社会福祉学』20号、同志社大学社会福祉学会、2006年、70-85ページ。「台北市大稲埕『人類の家』創設者・稲垣藤兵衛—なぜ彼は本島人のためにセツルメント活動を展開したのか—」『キリスト教社会福祉学研究』40号、日本キリスト教社会福祉学会、2007年、70-80ページ。「日本植民地下台湾の稲江義塾—稲垣藤兵衛の基督教社会事業をどうとらえるか—」『キリスト教社会福祉学研究』42号、日本キリスト教社会福祉学会、2009年、107-116ページ。
- 2 同志社時報社『同志社時報』115号（1914年）に次のように記されている。「大正三年三月二十日、原田助社長のもと、第三十九回卒業式が挙行され、大学神学部八名、大学経済科（旧専門学校課程）二十八名、大学英文科（旧専門学校課程）二名、普通学校七十九名の計百十七名が卒業した。」原田助（1863—1940年）は、『東西洋の文明を融化し、両者の長所を結合して世界的新文明を建設する』ことのできる国際感覚豊かな人材の育成を標榜した『同志社の国際人』として知られている。（同志社山脈編集委員会（編）『同志社山脈—113人のプロフィール—』（晃洋書房）2002年、19ページ。）
- 3 少年出獄人感化保護施設・大式仁義塾主事として活躍。後に日本基督教団弓町本郷教会牧師。
- 4 労農党衆議院議員、治安維持法に反対し暴漢に暗殺される。
- 5 宣教師として中国にわたり、北京朝陽門外に崇貞学園を設け貧民救済にあたる。
- 6 差別と迫害に徹底して抗した基督教教育者。周は台北市大稲埕公学校（現=太平国民小学）を卒業している。
- 7 1966年、台湾基督長老教会により創設された大学。同大学より提供された『台湾文学評論』9巻2号、2009年には次の論文が掲載されている。張良澤『「稲垣藤兵衛」是誰?』50-52ページ。劉峰松『「人類的使徒」稲垣藤兵衛—兼述松丘傷感有趣的自白』53-70ページ。なお張良澤は同大学台湾文学資料館館長、劉峰松は国史館台湾

文献館（南投県）前館長である。

- 8 同会発行の経典雑誌（編著）『台湾慈善四百年 清領編、日治編、戦後編』経典雑誌、2006年の献本を受けた。同書は台湾社会福祉研究の第一人者林萬億（台湾大学社会工作学系教授）が監修している。なお同会は、仏教をその指導理念に据えたNGO組織で、海外を含め広域的にボランティア活動を展開している。
- 9 「台北『人類之家』挙行盛大的卒業式」『台湾民報』1928（昭和3）年3月25日 地方通信欄 台北台湾雑誌社（東方文化書局復刊、1973—1974年）。
- 10 林茂生（古谷昇訳）『日本統治下の台湾の学校教育 開発と文化問題の歴史分析』（1929年コロンビア大学博士論文）拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター、2004年、54ページ。
- 11 井出李和太『台湾治績誌』台湾日日新報社、1937（昭和12）年（南方資料叢書9、青史社、1988年、46ページ）。
- 12 『非台湾』1927（昭和2）年3月20日（澁谷定輔文庫 埼玉県富士見市立中央図書館所収）。
- 13 『聯合』1995年10月24日、聯合新聞。
- 14 台湾総督府文教局（編）「台湾社会事業要覧 昭和六年三月」（永岡正己（総合監修）・大友昌子・沈潔（監修）『植民地社会事業関係資料集 台湾編 2巻』近現代資料刊行会、2000年、351-352ページ）。
- 15 『台湾日日新報』大正11年1月31日、2月2日、2月4日（1922年1月—3月、影印本83、五南図書出版、1994年、266、282、298ページ）。
- 16 史可乗「人類之家・台湾 ESP学会」『台北文物』3巻1号、台北市文献委員会、1954年、91-93ページ。
- 17 『非台湾』、前掲紙。当時『台湾民報』に、「稲垣が月刊報紙を創刊し『人類愛』の視点から現代社会の問題を論じ民衆を警醒している。」と報じられた（『「非台湾」出現了』『台湾民報』152号、1927（昭和2）年）。
- 18 揚井克己他（編）『矢内原忠雄全集 23巻 満州・朝鮮・沖縄』岩波書店、1965年、516ページ。
- 19 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会（編）『近代日本社会運動史人物大事典』紀伊国屋書店、1997年、344ページ。
- 20 竹内信子『植民地台湾の日本女性生活史 2大正篇』田畑書店、1996年、234ページ。
- 21 生江孝之「台湾社会事業私見」『社会事業』8巻2号、中央社会事業協会、1924年、21ページ。

- 22 生江孝之「隣保館の話」『社会事業の友』台湾社会事業協会、1932年、41ページ。
- 23 生江孝之『日本基督教社会事業史』教文館出版部、1931年、『戦前期 社会事業基本文献 33』日本図書センター、1996年、307ページ。
- 24 井上伊之助『台湾山地伝道記』新教出版、1960年、304-305ページ。同書は、井上の『生蕃記』警醒社書店、1926年、『蕃社の曙—台湾伝道の思い出—』ともしび社、1951年に、「雑」 「台湾関係来信」を加えたものである。
- 25 片倉佳史『観光コースでない台湾 歩いて見る歴史と風土』高文研、2005年、53-56ページ。
- 26 大友昌子「台湾窮民の生活と社会事業—台湾における1920年代～1930年代『社会調査』からの一考察—」台湾史研究部会（編）『台湾の近代と日本』中京大学社会科学研究所、2003年、165-167ページ。
- 27 1896（明治29）年、小児保育院（現＝児童養護施設 鎌倉保育園）を創設。旅順、台北、京城、北京などに支部を開く。内村鑑三門下生。同台北支部を大稲埕下奎府町一丁目に開設。そこは1928（昭和3）年から1930（昭和5）年まで、人類之家とは約200メートルの至近距離にあった。その後、1930（昭和5）年、城内佐久間町へ移転する。
- 28 益富政助『聖愛』鎌倉保育園、1922年、139ページ。なお、吉村良司（編）『日誌 佐竹音次郎』社会福祉法人鎌倉保育園、1976年を確認したが、稲垣藤兵衛及び稲江義塾に関する記載はない。
- 29 『台湾日日新報』大正15年12月3日（影印本108、五南図書出版、31ページ）。
- 30 近代日本社会運動史人物大事典編集委員会（編）、前掲書、344ページ。
- 31 同会は設立趣意書に「台湾文化ノ向上ヲ謀ラントス。・・・相互ニ道德ノ神髓ヲ切磋シ、教育ノ振興ヲ計リ、体育ノ奨励ヲ行ヒ、更ニ芸術ノ趣味ヲ養ヒ、以テ其ノ発達ヲ穩健ニ、其ノ帰結ヲ期セントス」と謳っている。
- 32 伊藤潔『台湾 四百年の歴史と展望』中央公論社、1993年、113ページ。
- 33 陳芳明「連温卿與抗日左翼の分裂—臺灣反殖民史の一個考察」『20世紀臺灣歴史與人物—第六屆中華民國史專題論文集—』國史館印行2002年、3ページ。
- 34 謝仕淵「熱血男兒 蔣渭水」財團法人公共電視文化事業基金會（編）『台湾百年人物誌 1』玉山社、2005年、16ページ。
- 35 又吉盛清『台湾 近い昔の旅 台北編 植民地時代をガイドする』凱風社、1996年、240ページ。
- 36 吉田莊人『人物で見る台湾百年史』東方書店、1993年、49ページ。
- 37 井上伊之助『台湾山地伝道記』新教出版、1960年、304-305ページ。
- 38 黄式杰「怪傑稲垣藤兵衛」『台北文物』2巻3号、台北市文献委員会、1953年、109-110ページ。
- 39 生江孝之「台湾社会事業私見」『社会事業』8巻2号、中央社会事業協会、1924年、21-22ページ。
- 40 岩本秋心『解剖せる稲藤』岩本嗣泰発行（台湾新聞社印刷）、1923年、184ページ（同志社大学社史資料センター所収）。本書では、「総督府は本島における各種社会事業、教育事業に対し補助金を下付しているにもかかわらず、稲江義塾に対しては何故か一文も補助金を出さない。」（126ページ）など事実誤認の記載が散見される（実際には総督府から継続して補助金を得ている）。「掻払ひ主義の自廢運動」（1-44ページ）、「自廢問題に対する警察側の態度」（145-156ページ）「社会に代わりて偽善者稲垣藤兵衛に與ふ」（157-184ページ）など、本文の大半を婦人保護運動に対する批判に費やすことから、著者は娼妓の自廢の援助により損害をこうむる側の代弁者であったと思われる。
- 41 台湾総督府警務局（編）『台湾総督府警察沿革誌』第2編、「領台以後の治安状況」中巻、1939年刊（台湾総督府警務局（編）『台湾社会運動史』龍溪書舎、1973年、890-891ページ）。
- 42 劉峰松、前掲書、62ページ。もしそうなら、稲垣は太魯閣蕃の役に加わっていたことになる。
- 43 會顯章『張維賢』国立台北芸術大学、2001年、43ページ。
- 44 黄式杰、前掲書、109-110ページ。
- 45 莊永明「主張『非台湾』的日本怪傑」『台湾紀事』上、時報文化出版社、1989年、314-315ページ。『台北老街』時報文化出版、1991年、65ページ。
- 46 又吉盛清、前掲書、241ページ。
- 47 同教会には同志社出身の蔡受恩牧師（2代）（在任期間1937-1939年。淡水中学から同志社中学編入）、載伯福牧師（4代）（在任期間1961-1973年。淡水中学から同志社中学編入）がいる（台湾基督長老教会鯤鯓教会『台湾基督長老教会鯤鯓教会設立120周年紀念特刊』1996年）。
- 48 井上伊之助、前掲書、304-305ページ。

- 49 3,108名の兵士、3,127名の警察、4,840名の入夫の総計1万人を動員して3千人あまりの壮丁(血気盛んな若者)しかいない太魯閣蕃(花蓮木瓜溪上流及び立霧溪上流一帯)を攻めた。(呉密察(監修)、遠流台湾館(編著)、横澤泰夫(訳)『台湾史小事典』中国書店、2007年、170ページ。)
- 50 岩本秋心、前掲書、76ページ。
- 51 経済学者、同志社大学教授(在任期間1912(明治45)―1922(大正11)年)、岳父徳富蘇峰が主宰する国民新聞記者、戦後、早稲田大学総長を歴任。
- 52 「台日講壇 資本主義的財政と社会主義的財政(一)～(四)」大正11年1月31日、2月1日、2月2日、2月3日(『台湾日日新報』、前掲書、265、273、282、289ページ)。
- 53 『緒土に芽ぐむもの』を出版以降、社会問題を題材にした長編小説を多く発表。プロレタリア作家としての地位を築き、戦後、衆議院議員を2期務めた。(日本アナキズム運動人名事典編集委員会(編)『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版、2004年、462-463ページ。)
- 54 本庄豊『山本宣治一人が輝くとき』学習の友社、2009年、22ページ。
- 55 阪口直樹『戦前同志社の台湾留学生―キリスト教国際主義の源流をたどる―』白帝社、2002年、76-90ページ。
- 56 劉峰松、前掲書、62ページ。
- 57 「台湾総督府所属官署概表1895年5月―1945年8月」デジタルアーカイブ 近現代アジアのなかの日本 ジェトロ アジア経済研究所 <http://opac.ide.go.jp>
- 58 朱天心『古都』城邦出版集団、2002年、230ページ。
- 59 東京帝国大学教授、内村鑑三門下生。新渡戸稲造の思想を継承し人道主義的な立場から植民政策学を講義。台湾文化協会の活動を支援した。
- 60 若林正文(編)『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』岩波書店、2001年、49-52ページ。『臺灣全記録:15000B.C.～1989A.D.』のなかで、林本源家を「日本領台時、為台湾首屈一指の富豪。」として、「1898年8月2日、台湾総督児玉源太郎が林家を訪問。」「1903年11月15日、林本源家は自邸花園で日本の文武官と紳士150人を招待し園遊会を開催した。」と記している。(戴月芳、羅吉甫主(編)『臺灣全記録:15000B.C.～1989A.D.』錦繡出版社有限公司、1990、167ページ、178ページ。)
- 61 総督府文教局(編)『台湾社会事業要覧 昭和六年三月』、前掲書2巻、351-352ページ。
- 62 井出李和太、前掲書、1002ページ。
- 63 呉密察、黄英哲、垂水千恵(編著)『記憶する台湾 帝国との相克』東京大学出版会、2005年、246ページ。
- 64 マタイによる福音書9.11-13、マルコによる福音書2.16-17、ルカによる福音書5.30-32。
- 65 同志社大学社会福祉学会(編)『社会福祉の先駆者たち』筒井書房、2004年、4ページ。室田保夫(編著)『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』ミネルヴァ書房、2006年、114-115ページでは、山室軍平の社会事業実践の起点を、新島の死去にともない「謹ンデ其遺志ヲ継ガンコトヲ其在天ノ靈ニ誓フ」と新島の遺志を継ぐことにあったとする。また、同志社山脈編集委員会(編)『同志社山脈―113人のプロフィール―』晃洋書房、2002年、89ページでは、留岡幸助を「同志社の戦前の社会事業の中心」と述べる。
- 66 井上伊之助、前掲書、304-305ページ。
- 67 揚井克己他(編)『矢内原忠雄全集 25巻 交友・追憶』岩波書店1965年、467-468ページ。
- 68 若林正文、前掲書、264ページ。
- 69 井上伊之助『生蕃記』警醒社書店、1926年、序。
- 70 井上伊之助『台湾山地伝道記』新教出版、1960年、342ページ。
- 71 同上書、306-307ページ。
- 72 林玉茹・李毓中(森田明監訳)『台湾史研究入門』汲古書院、2004年、169ページ。
- 73 稲場満、山下幸夫(編)『内村鑑三の継承者たち 無教会信徒の歩み』教文館、1995年、66ページ。
- 74 台北市私立愛愛院から資料提供を得た。併せて以下の文献を参考に展開した。林満秋「從京都小姐變成乞丐之母」『台湾心女人』遠流、2000年。李筱峰・莊天賜(編)『快讀臺灣歷史人物』玉山社、2004年。徐蘊康「人間大愛 施乾與清水照子」『台湾百年人物誌1』財團法人公共電視文化事業基金會、玉山社、2005年。
- 75 王昶雄(編)『孤苦人群録』台北縣立文化中心出版、1994年。
- 76 周合源先生治喪委員会「悼念周合源」『海峽評論』37巻、海峽評論雜誌社、1994年、55ページ。
- 77 中村孝志「小竹徳吉伝試説―台湾のベスタロッチー―」『南方文化』7号、天理南方文化研究会、1980年、104ページ。
- 78 小竹キヨ(1885-1980年)は、日本女子大学

- 校創立翌々年の入学（第3回生）で、校長成瀬仁蔵をはじめ敬虔なクリスチャン教師に接した。石井十次の岡山孤児院で保母として実践した基督者であった。夫徳吉の病没により帰国後、京都市立盲啞院の教師となり、1920年代を中心に盲聾教育界の実践家として活躍した。（聾教育開学百周年記念事業実行委員会『京都府盲聾教育百年史』、1978年。）
- 79 王昭文「拯救乞丐の社會改革者—施乾」『20世紀臺灣歴史與人物—第六屆中華民國史專題論文集一』國史館印行、2002年、368-369ページ。
- 80 1872年、淡水に入り、ここを宣教の地と決め、また、医療と教育の基地とした。その後、台湾人張聰明と結婚。長女媽連、次女媽以利もまた台湾人と結婚した。そして、1901（明治34）年「淡水、我永遠的故郷」という言葉を残し台湾に永眠する。馬借は伝道のみならず、医療、教育、農芸などさまざまな分野・領域で活動している。馬借の台湾への貢献として、伝道（60所の教会を設立、信徒4千人）、医療（抜歯約2万1千本、1880（明治13）年、借醫館開設）、教育（1882（明治15）年、牛津學堂開学（現=私立淡江高級中學）、農芸（キャベツ、カリフラワー、サトウダイコン、セロリ、台湾アカシアなど）多岐にわたる。（『台湾基督長老教會艦艀教會設教120週年紀念特刊』臺灣基督長老教會艦艀教會、1997年、17-23ページ。）
- 81 『非台湾』、前掲紙。
- 82 劉峰松、前掲書、62ページ。
- 83 賀川豊彦「最後の悲劇」1925（大正14）年8月16日 於イエスの友関西聯合修養会（『賀川豊彦全集第10巻』キリスト教新聞社、1964年、179-188ページ）。
- 84 王昭文、前掲書、370-374ページ。
- 85 『台湾日日新報』、前掲紙。
- 86 施乾「乞丐底問題」『台湾民報』67号、1925（大正14年）、前掲書、32-34ページ。
- 87 台湾總督府警務局（編）、前掲書、890ページ。
- 88 同上、891ページ。
- 89 莊永明「台湾新劇第一人」『台湾紀事』上、時報文化出版社、1989年、423ページ。
- 90 台湾總督府警務局（編）、前掲書、891ページ。
- 91 愛愛寮理事長、台北州會議員。明治21年京都府生まれ、明治42年台湾總督府作業所勤務、大正5年中央大学法科卒業、同12年弁護士試験合格と共に開業、台北出征軍人後援会扶助部長、台湾競馬協会会長、台北馬事協会会長を歴任した。（CD-ROM版『台湾人物誌 日本統治時代（1895-1945年）』Part1,2,3 雄松堂、2004年。）
- 92 王昭文、前掲書、383-384ページ。
- 93 林萬億「当代慈善特色 從救濟轉為福利的社福事業」經典雜誌（編者）『台湾慈善四百年 清領編、日治編、戦後編』經典雜誌、2006年、138ページ。
- 94 台湾總督府文教局（編）『台湾社会事業要覧 昭和九年九月』、前掲書4巻、154ページ。
- 95 台湾總督府文教局（編）『台湾社会事業要覧 昭和十四年十一月』、前掲書7巻、3-13ページ。
- 96 「無月謝にて内地人、本島人の盲啞者に普通教育を施し独立自営に必要な技芸を授く、貧困にて就学し能はざる盲啞者を給費生として寄宿舎に收容し給ての費用を給す、通学する貧困者には昼食料等を給す、事業開始当時は設立者及教師一名にて速成按摩科を授業せしも其後遂次拡張し現在校長以下八名にて盲生四一、啞生四八名の教育を為す。」（台湾總督府文教局（編）『台湾社会事業要覧 大正十五年三月』、前掲書1巻、197-198ページ。）
- 97 莊永明「真愛台湾 木村謹吾與稲垣藤兵衛」『台湾慈善四百年 清領編、日治編、戦後編』經典雜誌、2006年、116-117ページ。
- 98 佐竹要平「佐竹音次郎と小児保育院—事業を支えた家族—」『キリスト教社会福祉学研究』42号、日本キリスト教社会福祉学会、2009年、95ページ。
- 99 吉村良司（編）『日誌 佐竹音次郎』社会福祉法人鎌倉保育園、1976年、654-679ページ。
- 100 台湾總督府文教局（編）『台湾社会事業要覧 昭和八年三月』、前掲書3巻、204ページ。
- 101 周婉窈（濱島敦俊監訳）『図説 台湾の歴史』平凡社、2007年、220ページ。
- 102 吳明儒「社区發展與組織再造—台湾高齢社区照顧模式之比較分析」6ページ。（台湾福利学会國際學術檢討會『社会暨健康政策的變動與創新趨勢：邁向多元、整合的福利体制』<http://swat.sw.ccu.edu.tw> 台湾福利学会 Web）
- 103 永岡正己（総合監修）・大友昌子・沈潔（監修）、前掲書11巻、331ページ。杵淵は隣保館を隣保制度の中核として捉えるが、この隣保制度とは、「一国の各下級地方行政区画内を一定の戸数又は地域を標準として、之を多数の地区に細分し、其の地区内の隣接各成員が隣保団結の力を以って、東洋固有の隣保相扶の精神と連帯責任の觀念とに基づき、・・・、以って地方行政の運営

- を輔くるの目的を以って設定された国営の自治制度」であった。つまり彼は、隣保相扶の公的制度化（国営教化社会事業）を担う中心的組織として公設・準公設の隣保館を位置付けた。（同上書、9ページ。）
- 104 生江孝之「台湾の印象と希望」『社会事業の友』28号、台湾社会事業協会、1931年、3—4ページ。
- 105 廖宜方『圖解台湾史』易博士文化、2004年、188—189ページ。
- 106 王順民『宗教福利』亞太圖書出版社、1999年、20ページ。
- 107 生江孝之「隣保館の話」『社会事業の友』、41号、台湾社会事業協会、1392年、92ページ。
- 108 李天賞『台湾的社区與組織』揚智文化事業、2005年、135ページ。
- 109 林萬億、前掲書、134—141ページ。
- 110 張良澤「『稻垣藤兵衛』是誰？」『台湾文学評論』9卷2号、真理大學、2009年、50—51ページ。
- 111 劉峰松、前掲書、67ページ。財団法人台北市私立協進幼稚園（台北市士林区）に移転し現存。
- 財団法人台北市私立協進幼稚園林慎記念奨学金を設け国内公私立大学独立学院の社会系、社会工作系在学の成績優秀な学生に給付している。
- 112 同上。富田哲「統治者が被統治者の言語を学ぶということ」『台湾教育史研究会通信』14号、台湾教育史研究会、2001年、25ページ。
- 113 李健鴻『慈善與宰制 台北縣社会福利事業史研究』北縣歴史與人物叢書5、台北縣文化中心、1996年、69ページ。
- 114 同上、82—83ページ。
- 115 大林宗嗣「社会事業の現代的様相と其の解釈」『社会事業』、1931年、中央社会事業協会。
- 116 山折哲雄「抑圧された賀川思想の回帰 M・ガンディーを超えるもの」『季刊 at』15号、オルター・トレード・ジャパン、2009年、27ページ。
- 117 永岡正己「書評Ⅲ『キリスト教福祉実践の史的展開』」『キリスト教社会福祉学研究』37号、2004年、120ページ。
- 118 邱定一『少年李登輝』商周文化事業、1995年、300ページ。